

ICP2016会場・展示委員会から

おもてなし

海外で開催される大きな国際会議に参加するときに何を期待するのでしょうか？ ①世界各国の著名な学者と交流する、②自分の研究成果を発信し、関心分野の最新の知見を吸収し、刺激を受ける、③普段の生活から離れて、その国の歴史、自然、人、食べ物など異なった文化に触れることなどでしょう。

ICP2016では、日本の参加者は自国にいながら、①、②の体験がかなえられます。③に関して、来日する多くの心理学者にその体験をしてもらえるようなソーシャルプログラムを組んでいます。

優雅な琴の調べからオープニングセレモニーが始まり、若者の踊りの熱気でウェルカムレセプションへ誘います。コンgresディナーの夕べには、このたび世界無形文化遺産に登録された和食の芸術を味わう着席型の会場と、交流を

楽しみながら食べたり踊ったりできるbuffet型の会場の2種類を用意し、その2つの会場をつなぐホワイエでは、夏の縁日のような小さなお店、飴細工、切り紙細工などを楽しめます。……忍者も来るかも？

会期中に、茶道、華道コーナーや、着物の着付け教室などの日本の文化体験はもちろん、ツアーのコースには、日本庭園、お寺での座禅体験や精進料理なども用意いたします。

展示会場に日本の四季の美しさを映しだし、自然を尊重し、多様な文化の中でハーモニーを保ち平和を願う日本人の心を感じてもらえるような工夫もしたいですね。

会場・展示委員会では、国際会議の常連も若者も、アカデミックプログラムだけでなくソーシャルプログラムの魅力でもICP2016に参加したくなるような、心のこもった日本のおもてなしを考えています。

(ICP2016会場・展示委員会委員長 野口京子)

日本心理学会 若手の会から

つながることで

今回は少し趣向を変えて、「若手がつながる」ということについて書いてみようかなと思います。世話人の一人が、8月上旬にカナダのトロントで開催された米国心理学会（APA）の年次大会に参加してきました。目的の一つにICP2016のプロモーション活動があったのですが、なんとAPAに参加しているわけではないけれど、ちょうどトロントにいたのでと言って広報を手伝いに来てくださった米国在住の若手の会のメンバーがいました。会のメンバーとはメールのやり取りをすることも多いのですが、実際に会って、お顔を見て、お話しすることができ、「若手の会では、こうやって分野や国をこえて、『若手』としてつながっていけるのだなあ」と、感慨深いものがありました。

近年の安全保障や和平、また環境や食料に関する問題など、世界には自国だけでは解決できない課題が山のようにあります。しかし、一国だけでは解決できない問題も、世界が互いに

手を取り、知恵を出し合えば、解決の方向性はきっとみえるのではないかと思うのです。同様に、アカデミアも一つの分野や一つの国だけでは乗り越えられない壁はたくさんあるけれど、分野をこえて、国境をこえてつながることで、きっと新たな方向性、新しい解決策が見えることってたくさんあるのではと感じます。世界情勢も、社会事情も、日々刻々と変わりゆく中で、心理学だからこそできることはたくさんあるはずです。私たち若手が自分の枠をこえて、互いが互いを尊重し、理解し、協力できるようになった時、私たちはきっと人びとに役立つ心理学を提供していけるようになるのではないのでしょうか。

「若手」の時期だからこそ、パーソナルレベルでつながり、多角的かつ柔軟に物事をとらえる。そして、新しい視点を心理学に吹き込めるようなつながりを作れる若手の会になればと思います。

(若手の会共同世話人 小川健二・鈴木華子)